むなかた

令和五年　神無月　753号

目次

秋季大祭　3・2
神宝館特別展　4
豊饒祭・西日本菊花大会　5
造営日記　5
神宝館だより・みこころ　6
宗像大社歌会詠草　7
御造営奉賛者御芳名　7

よてす。森厳な姿を玄界灘に浮かべる沖ノ島は古来斧鉞が入らず、天然林が残る境内には『千古不朽』の石碑が建つ。また沖ノ島に限らず、歴史が古く、木々には神が宿るという考え方から、神社には巨木や文化的価値のある樹木が残されている▼当社も複数の巨木が存在するが、この夏辺津宮にて樹齢数百年のナラの木が枯れてしまった。原因は特定の虫が媒介した菌が木を枯らしてしまう伝染病であった。この昆虫媒介による現象は全国的に進行しており、里山と人間の関わり方の変化が要因のひとつであると考えられている▼里山では、木炭などの資源調達の為、適度に樹木を伐採することで生態系のバランスがとれていたが、近年の産業構造の変化により、放置され増加した大径木を好む害虫が増加。その為、ナラ枯れが発生したと考えられている▼時の流れか、数百年生きた樹木の枯死は非常に残念であったが、境内では枯死する数年前に採取した実から生命を繋いだ新たな若木が育っている。姿は変わってもナラの木の歴史は朽ちていない。（壹）

中津宮

秋季大祭　斎行

辺津宮秋季大祭
十月一日・二日・三日

辺津宮の秋季大祭は、一日のみあれ祭で幕を開ける。

沖津宮（田心姫神）と中津宮（湍津姫神）の御神威を辺津宮（市杵島姫神）にお迎えする神事は、御祭神の御神威のさらなる発揚を表わしている。

当日は一〇〇隻の船団により大島港から神湊港まで海上神幸を行い、その後は地域の有志による陸上神幸で、辺津宮に入御される。

二日の例祭では皇室国家の安泰、五穀豊穣を祈り、主基地方風俗舞が奉奏される。

三日は、高宮祭場、第二宮・第三宮、宗像護国神社でそれぞれ秋季大祭を斎行。その後の総社祭では地元中学生による浦安舞が奉納される。夕刻、高宮神奈備祭を斎行し、宗像大神の御神威の無窮を祈り三日間に亘る秋季大祭を締めくくる。

沖津宮・中津宮秋季大祭
十月二十九日

沖津宮と中津宮の秋季大祭は毎年旧暦の九月十五日に斎行している。沖津宮は玄界灘の沖合に位置する沖ノ島に鎮座している為、定めた日時に渡島することが困難であることから、拝殿の役割を持つ沖津宮遙拝所で斎行している。

当日は、早朝より大島内に鎮座する厳島神社、御嶽神社、沖津宮遙拝所にそれぞれ神職が赴き祭典を斎行。その後、中津宮にて秋季大祭を斎行する。辺津宮と同じく、島内氏子による奉幣や巫女による浦安舞の奉納が行われる。

この大祭においては、漁業の島である大島全体が漁止めとなり、また境内では島民こぞって参加する奉納演芸大会も開催され、島全体を挙げて賑わいをみせる。

神宝館特別展
国宝と現代の名匠三右衛門

十月一日、当社神宝館において特別展「国宝と現代の名匠三右衛門」が開幕した。

本特別展では「肥前の三右衛門」といわれる、有田焼の今泉今右衛門、酒井田柿右衛門、唐津焼の中里太郎右衛門の三大名跡に伝わる歴代作品と、神の島「沖ノ島」から出土した数々の国宝を一堂に展示する。

宗像は太古より大陸との交流の窓口として繁栄してきた。宗像大社の創建は古く『日本書紀』には宗像三女神の誕生とともに「歴代天皇を助ければ、歴代天皇に祀られる」とあり、宗像は外交、通商、国防において重要な役割を果たした。歴代天皇の祭祀をしのばせる神の島「沖ノ島」から出土した八万点に及ぶ国宝の数々。なかでも日本で最初に作られた多彩釉陶器「奈良三彩小壺」は、天皇による神祀りとの深いつながりを示すものである。伝統と創意の融合から生まれた至宝ともいえる「三右衛門」の作品と、沖ノ島に捧げられ敬虔な信仰により守られてきた荘厳優美な国宝が一堂に集う。時代を超えた国宝と匠の共演。秘められた技、洗練された美をかつてないスケールでお届けする。

● 期　間

第一期

令和五年十月一日～令和五年十二月三日

第二期

令和五年十二月六日～令和六年二月四日

※十二月四日、五日は展示替えの為閉館。

色絵薄墨墨はじき柘榴文蓋付瓶
十四代今泉今右衛門　2011年

濁手藤文水指
十五代酒井田柿右衛門　2020年

彫斑唐津茶盌
十四代中里太郎右衛門　2019年

豊饒祭

平成二十九年十月二十九日、天皇皇后両陛下御臨席のもと、宗像市にて開催された第三十七回全国豊かな海づくり大会福岡大会。宗像の有史以来、初めてのこの慶事を継承すべく、当社では毎年十月二十九日を「豊饒祭（ほうじょうさい）」という祭日、記念日とし、豊かな海、山、川、田畑を願う日として、後世に伝えるために実施している。

またこれに併せ、豊かな海づくり大会のために整備された鐘崎漁港にて、水産資源の保護・管理の大切さを広く伝えるため、豊饒の海を願う稚魚の放流行事も行っている。

令和五年十月二十九日（日）

豊饒祭　十一時
宗像大社辺津宮

稚魚放流行事　十二時三〇分
鐘崎漁港御製碑前

第五十三回 西日本菊花大会　開催

昭和四十六年、昭和の大造営を記念して始められ、今年で五十三回を迎える西日本菊花大会。境内は九州各県・山口の菊愛好家が丹精込めて育てた約一五〇〇鉢の菊花が展示されます。宗像の秋を彩る菊花展是非ご覧ください。

- 会期：令和五年十一月一日～二十二日
- 時間：九時～十七時
- 場所：宗像大社辺津宮　境内

時満ちて道ひらく 造営日記 55

国庫補助事業 辺津宮末社保存修理工事

六月から始まった宇生神社と政所神社の修理工事は、政所神社の銅板屋根が葺き上がるなど来年二月の竣工に向け順調に進んでいる。令和二年度より始まった、辺津宮末社二十二社の修復は、順調に進んでおり現在二十二社のうち仮宮を含め十社の修理工事が完了している。

神宝館だより 78
八万点ノ国宝収蔵

三省書状

宗像社と人々（四）

宗像大宮司家は神官であり武士であるという特徴を持つ。戦国期の古文書からは数々の戦、そして家臣団の活躍がうかがい知れる。

写真史料は「三省書状」。三省は詳細不明の人物であるが、僧侶であろうとされる。この書状の主な内容は「警固」（警固船のこと。輸送船を敵から守る軍船）の手配のことで、大島と大島周辺の海を守るよう指示しているものと思われる。現在まで変わらず豊かな宗像の海も、戦国時代には度々戦の舞台となった。

指示を受けたのは許斐氏鏡、占部貞保、吉田貞勝の三人。この内、許斐氏は宗像氏の一族で、許斐権現社の社官を由来とする。ある時期から宗像氏の家臣となり、この書状からもうかがえる通り、水軍の役目を担った。このことも関係するのだろうか、中世宗像社で執り行われた、宗像五社（第一宮、第二宮、第三宮、織幡宮、許斐社）の船が競う「船闘神事」は、許斐社の船が勝ち、神官が「めでたいことだ」と言祝ぐ神事だったと伝わる。

（津）

みこころ

高く澄みきった空に心も晴れ晴れするこの頃、周りの木々も徐々に色付き始め、過ごしやすい時期になって参りました▼当社では十月一日から三日の三日間、最も大切なお祭である秋季大祭が執り行われます。秋季大祭は五穀豊穣と海上安全及び大漁を感謝するお祭りです。みあれ祭から始まり、十月三日の夕刻に高宮祭場で秋季大祭が無事終了したことに感謝する高宮神奈備祭で締め括られます。宗像大社では月次祭や昭和祭などの恒例祭・例祭では浦安の舞・豊栄の舞を奉納しますが、神奈備祭で奉納する悠久の舞は年に一度です。この度、入社当時から憧れていた高宮祭場での悠久の舞を私自身が御奉仕させて頂ける事となり日々喜びを痛感しております。普段の舞は二人舞ですが悠久の舞は四人舞ですのでタイミングを合わせる事も難しく、いつも以上に慎重に練習に取り組んでいます。また装束も普段の舞とは異なり一層気も引き締まります。浄闇・虫の音が響く中斎行されます高宮神奈備祭に是非皆様もご参列くださいませ。（澤）

第746回　宗像大社歌会詠草

■大西晶子選　■毎月25日〆切（順不同）

炎天下こっそりと咲く百日紅手折りて飾る涼しい部屋に　堺　玲子

猛暑日の続いた今年、炎天下で咲く百日紅に同情した作者だろう。二・三句を〈こっそり咲いた百日紅を〉とすると生き生きした感じになる。

田植どき自転車で来る「アイスクリン」ははねる植縄の午後三時　早川　祥三

作者の思い出の中の田植えの風景。植縄が効いてリアルだ。言葉の順序を変え〈田植どき植縄はねる午後三時アイスクリン売りが自転車で来る〉。

いくつもの籾をつけたる穂は垂れて玄海よりの風にさゆらぐ　佐々木和彦

ゆったりとした読みぶりが実りの秋の豊かさによく合っている。四句は〈玄海からの〉とするほうが読み易い。

年号に和銅と謂うのがありました災厄に満ちたこの列島で　山﨑　公俊

歴史に詳しい作者らしい歌。和銅（西暦七〇八年～七一五年）は国産の銅が献じられたのを記念し変えられた年号だ。令和がどういう時代だと将来見られるかを想像する作者だろうか。

坊守りが来て経をあぐ盆の前いつもと違うよもやま話　吉﨑美沙子

お盆はお寺さんも忙しい。住職だけでは間に合わず夫人と思われるが坊守さんがお経を上げに来られたのだろう。面白い場を切り取った一首。

シスレーの坂道辿れば天国の母にも会えそうポプラの木陰　本田エリナ

シスレーの絵の風景に入って坂道をたどると亡くなったお母さんに会えるのではないかと空想する作者。結句は〈ポプラの木陰で〉としたい

人間は動物なりと証明す中距離走の選手の四肢　東　雅子

作者は疾走する選手の手足に足の速いチータやシマウマなどの動きに似たものを見取ったのだろう。人間の本質に触れる感覚が鋭い。

めでたくも夫婦で米寿お祝し卒寿にむけて健康努力　秋吉　嘉範

ご夫婦でそろって米寿を迎えられた作者の慶びの歌。二・三句を〈夫婦で米寿の祝いをし〉結句〈健康努力す〉とすると言葉が落ち着く。

◆選者詠

孫のゐぬ間にパソコンをつかいませうYouTube見せよといはれぬうちに

あたらしきスニーカーためすによき遠さ郵便局へ七分あるく

第716回　俳句

早苗饗の寿司折甘い母の味　早川　祥三

御造営奉賛者御芳名

（令和五年八月）（順不同・敬称略）

一〇、〇〇〇円

大分市　都甲眞一郎
さいたま市　石塚　雅子
羽曳野市　谷口商事㈱
川崎市　林　正たか

五、〇〇〇円

嘉穂郡　吉貝威芙紀
久留米市　空いろのたね
三井郡　仲唐　英史
宗像市　沖　健太郎
大田区　石川真由実
町田市　森脇　敬普
入間郡　佐々木　修
別府市　小野　哲治
北九州市　山元　佳典
目黒区　太田れい子

三、〇〇〇円

鳥栖市　花本　賢
鳥栖市　（社法）みどりの杜

二、〇〇〇円

熊谷市　杉田　富子
江戸川区　清水かおり
常総市　廣瀬　真也
大阪市　村島国際法律事務所
大和市　遠藤　勝也
調布市　川野　道久
柏　市　高橋　利治
福岡市　穴井　義則
柳川市　㈱川口建設

むなかた
神無月（かんなづき） 第753号
2023年10月1日発行(月刊)／宗像大社 〒811―3505 福岡県宗像市田島2331 電話(0940)62―1311(代) https://www.munakata-taisha.or.jp/

10月 まつりごよみ

1日	みあれ祭	午前９時30分
	辺津宮入御祭	午後12時10分
2日	流鏑馬神事	午前８時
	例祭	午前11時
3日	高宮祭、第二宮・第三宮祭	
	宗像護国神社秋季大祭	午前10時
	秋季総社祭	午前11時
	南坊流献茶祭	午後２時
	高宮神奈備祭	午後６時
15日	総社月次祭	午前11時
	引続き 高宮祭、第二宮・第三宮祭	
17日	表千家献茶祭	午前11時
29日	沖津宮秋季大祭	午前９時(沖津宮遙拝所)
	中津宮秋季大祭	午前11時(中津宮)
	豊饒祭	午前11時

宗像大社

編集後記

「旅」「旅行」は英語では「travel」という。困難やトラブルといった意味がその語源とされている。一方で日本語の「旅」であるが、これは旅先での人との関わりを表わす、「他人の火（灯）をいただく」ということが語源となっていると言われる▼まだ宿場等が整備されていない時代に旅先の民家で食事や寝床の施しを受けることに由来したのである▼現代では宿泊施設や交通手段も整備され、旅の利便性は格段に増した。「他人の火をいただく」という感覚を持つことが難しいかもしれないがトラブルが語源の旅行より、「旅」を意識した秋の行楽をしてみてはいかがだろうか。（黒）